

## 昔話のコスモロジー —『笠地蔵』の分析心理学的解釈の試み—

宮野素子

Cosmology in a Japanese old tale:  
Psychological Interpretation of the Japanese old tale  
“Kasa Jizo (Bamboo Hats for Jizo)”<sup>(1)</sup>

Motoko MIYANO

## 要約

分析心理学では、昔話を集合的無意識の表象であり、人類に共通の心のありようや知恵を映し出すと考える。本稿は、日本人にとって最も広く親しまれている昔話『笠地蔵』を取り上げ、物語の構造と構成要素について分析心理学的立場から考察する。単純な物語展開でありながら、テキストの象徴論的解釈によって、この物語が個人の心の神話的領域につながることを明らかにしている。

## Abstract

Analytical psychology has considered old tales representative of the collective unconscious, illustrating psychological behavior and wisdom of the human species. This paper explore the structure and the elements of a Japanese old tale, “Kasa Jizo”, which is one of the most widely spread in Japan, from the view point of analytical psychology. Despite its simple expression, careful investigation of symbolism in the text shows psychological significance of this tale, namely, cosmology of an individual psyche.

## I はじめに

分析心理学 Analytical psychology は、イメージの心理学である。Jung, C.G. は、「無意識の部分は、一時的に不明確になった考えや印象やイメージの重なりから成り立っており、それは失われたものであるにもかかわらず、われわれの意識的な心に影響を与え続けている」<sup>(2)</sup>と述べる。Freud, S. は無意識の内容について、個人を取り巻く文化背景や家庭環境などの生育上の葛藤—とりわけ性にまつわる個人的葛藤—と考えると、葛藤の抑圧を症状形成のメカニズムと関連づけた。彼は、ギリシャ神話の研究から人類に普遍的な心理学的テーマ見出し、それをエディプス・コンプレクスと名付けたが、これもまた、解釈においては個人的葛藤の水準にとどまっている。しかしながら Jung は、ある時、精神科医として関わる一人の患者が語った妄想の内容<sup>(3)</sup>が、遙か昔ローマ時代に隆盛したミトラ信仰の祈禱書に風の起源として記述されていることを発見した。さらに Jung は、これが単なる偶然の一致ではなく、その後も彼が出会う患者の夢や絵画にしばしば神話的なモチーフが見られることから、人間の心の深層に時空を超えた人類に共通の領域の

存在を確信した。

私たちは、自分がおかれた文化や時代背景に関わりなく、遠い時代の神話や昔話に心を躍らせる。多くの人々が、遠いヨーロッパに語り継がれたグリム童話の幾つかを思い浮かべることができるだろう。子どもから成人まで幅広い支持を得た『聖闘士星矢』<sup>(4)</sup>の物語は、ギリシャ神話を下地とするようだが、冥界下りのモチーフは、愛するエウリディケを追ってハデスの国に降りてゆくオルフェウスだけでなく、イザナミの死を嘆き黄泉の国へと向かうイザナキのエピソードとしても語られている。これらの物語は、読み手に物語の世界を体験させ、太古の昔から人類が共通して持ち続けるある種の感情を伴う感覚を呼び覚ます。

さて、日本人に最も親しまれている昔話のひとつに『笠地蔵』がある。しんしんと雪の降る大晦日の晩、じょやさじょやさとしてゆくお地蔵さまの後ろ姿を思い出す人も多いだろう。教育現場で教材として取り入れられる歴史をもち<sup>(5)</sup>、例えば現行の小学校低学年用・道徳の副読本に採用<sup>(6)</sup>されている。『桃太郎』のような英雄譚でもなく、勧善懲悪譚の代表である『花咲爺』に登場する

悪い隣人もなく、物語は静かな年越しの夜にひっそりと展開する。ドキドキと胸騒ぐクライマックスもなく華やかさも、複雑な仕掛けもない、この小さな物語が、なぜこれほど広範な分布を持ち長く語り継がれているのだろうか。本稿では、象徴論を頼りに『笠地蔵』を読み進むこととする。さらに分析心理学における昔話解釈の手法によって、この物語の目的が単なる娯楽でも道徳教育でもなく、時代や文化的背景を超えた、人類の普遍的な心的営みの反映としてのもう一つの意味を持つことが明らかになるだろう。なお、聴き語りの昔話の常として、『笠地蔵』もさまざまなバージョンを有するが、ここでは、関敬吾による『日本昔話大成』所収のテキストを使用する。

## II 物語

### 笠地蔵<sup>(7)</sup>

むがしあるところに、軒端こ茸く茅こさえ一本もない爺さまと婆さまがあったどす。師走も迫った年越しの日が来ると、婆さまはかねがね丹精して貯めておいた糸臍をとり出して、爺さまし、爺さまし、これでも町ちゃ持ってって、暮れの町用ば足してきてお出えれやどいった。爺さまは、それもそんだな、仕方ないど、それば持って町さ行ったが、だれもこの年越しあだりに糸臍など持ち回しても、相手にしてくれる人がながった。帰る途中で、これも売れないで困っていた笠売りど出会った。笠売りは爺さまば見ると、ときにそちらの糸臍売りの爺さまなす、なんぼ売れだどす。師走どもなればだれもかれも忙しいどみえで一笠も売れないが、困ったもんだ。どうせ売れないどうしならば、おらの笠どその糸臍こ取り換えっば、し申さねかどいった。そんだな、それもよがべど、気のええ爺さまは、笠五つどその糸臍をこ取り換えて帰るごににした。来るが来るが来ると、野中の六地藏さまが、雪っこかぶって頭からぬれて立っていた。これを見ると爺さまは、やあやあ、お地藏さまし、それではさぞ冷たかべなす。ちょうどここに笠を持っているが、おあげ申すべど、五つの笠をみんなお地藏さまにがぶせ、あどの一つのお地藏さまには、つぎはきだらけの自分の古手拭こをおかぶせ申して家さ帰ってきた。婆な、婆な、今帰ったじえ。あや、爺さまし、糸臍こあ、なんぼに売れだどす。それがさ。だめながったでえど、爺さまは、町で笠売りに会って笠と糸臍をこ取り換えたごどや、その笠を雪にぬれている野中の六地藏さまさおかけ申してきたごどなど、こと細かく話した。さうすか。それはまだええ功德してきたごど。それであ今年も漬け菜こかみかみ、湯このんで歳とるべもすど、早く寝でし

まった。ところが夜中ごろになると、表の方で、じょいさじょいさど、なにがひいでくるような掛け声が聞こえできた。婆な、婆な、この年越しの晩げえ、どこでが、石でもひく人だちがあるよだな。そんだなす。だんだん、こっちゃ来るようだねえすか。はで、ほんとだといってるうちに、前の口（玄関）さ、どさっと何が重たいものば置いだような音がした。婆な、婆な、今のはおらの家のよんだじえど、爺さまが起ぎで前の口の戸ばがり開けてみると、年越し祝いのお米だの肴さかなだのお金子だのが、づっぱり入っている吠かますがそごに置いてあって、笠こど手拭こがぶった六地藏さまだちが、じょやさ、じょやさど、向こうさ行く姿が見え申したどさ。これもお地藏さまへ爺さまが功德をしたからだどいう話。どんど払え。

—岩手県花巻市—

昔話の中で「大歳の客」<sup>(8)</sup>の類型に属す物語である。年越しの夜にみすばらしい身なりの座頭や物乞いなど異形の来訪者がある。家の者の応対いかんで、富がもたらされる、ひどい目にあうなどの結末となっている。たいていは、社会的にも経済的にも最底辺の階層に見受けられるひとびとが、それでもありたけを差し出して、無私無欲の行為の見返りとして財宝がもたらされる。我々の『笠地蔵』では、爺が唯一の財産である糸臍を笠と交換するエピソードが前半に、地藏との遭遇が後半に語られた上で、財宝がもたらされる。その他、笠売りの爺が笠を地藏にかぶせる、女房の織った布を被せる、あるいは、六地藏を主流としても地藏が一体であったり三体であったり、地域や時代によってさまざまなバージョンが存在するようである。本来、口承が主体でありその過程で時代や文化背景によって変形が起こるにしろ、地藏に自分の持てる財産—多くの場合は笠—を差し出すことで富がもたらされることは共通しており、なにより日本人にとって最も親しみ深い昔話の一つである。客人歓待の系統として関は、「物語の成立は古く、ギリシャのエウリーピーデス（紀元前四八五—四〇六）にまでさかのぼる」<sup>(9)</sup>と述べる。年越しの来訪者は、柳田國男によれば「小正月の来訪者」として各地で信仰されている年神であり、この物語も「表向きは地藏信仰の仏教色が施されているが、性格的には、古くから民間で信仰されている年神の系譜に連なっている」<sup>(10)</sup>いる。

## III 物語の分析心理学的解釈

### 1. むかしむかし、あるところに…

昔話では通常、誰それという個人性やいついつの時間やどこそこの空間を特定する要素は語られない。「むかしむかし、あるところに」、<sup>(11)</sup>「Once Upon a Time」が約

東事のように守られる。この物語の始まりも同じである。あらゆる個別性がそぎ落とされているからこそ、瞬間に、聴き手の意識は、日常から遠く隔たった時間と空間へ移動する。物語の主人公は、「爺さま」であり「婆さま」でしかない。特定の社会に所属し、特定の姓名なづけを持った現実の個人ではなく、分析心理学では、普遍的な心の構造や機能の人格化と解釈する。

さて、昔話の主人公が、物語の始まりにおいて「貧しい」という特性を帯びていることは多い。社会的下層に属するものの成功譚、無一文が長者へと姿を変える、子のない夫婦に子どもが授けられるなど、何か欠如している状態から、欠如や欠落の回復がもたらされる、あるいは、田螺の子どもや身の丈が一寸しかない子どもがもたらされるなど別の形での補償が語られる。もっとも、田螺息子も一寸法師もやがては美しい青年に変身するのだから、やはりこの意味において回復される。このような欠如と回復、さらには、ある状況から新しい存在様式への変容という物語の展開は、昔話やおとぎ話だけではなく現代の物語においても一たとえば、宮崎駿のアニメ『千と千尋の神隠し』は、主人公一家の引っ越し、つまり慣れ親しんだ町や人間関係の喪失に始まる一人々に受け入れられ、共感される。すなわち、お金や子どもそのものが問題ではなく、“喪失”の背後にある象徴的な意味をひとつとは無意識のうちに共有しているのである。

『笠地蔵』における爺さまと婆さまは、年越しの準備ができないほど困窮している。お金は精神分析的には心のエネルギーと解釈することができる。お金が個人の生活維持に欠かせないように、現実社会での目標の実現に必要なように、精神生活の維持や自己実現に不可欠な心のエネルギーを表象している。我々の物語は、この夫婦がたくさんの「お米だの肴だのお金子だの」を得ることで終わっている。それらはすべて生命エネルギーの源であり、回復されたものとは、心的エネルギーと解釈できる。

抑うつ状態を中核とするうつ病の症状のひとつに妄想がある。なかでも貧困妄想は、うつ病者の語りにはしばしば登場する。うつ状態とは、生物としての活動性が低下し意欲が喪失される状態である。周囲の物や出来事が生き生きと感じられなくなり、感情に彩られた生活が失われてゆく。実際、経済的な困窮は抑うつ気分を引き起こすと言われる。この物語の始まりである「貧しい」状況とは、心のエネルギーが枯渇した状態と見ることができる。物語の主人公が“爺さま”と“婆さま”という設定には、二重の意味を持つと考えられる。ひとつには、人生の終盤、行き詰まりの状況、エネルギーの“停止”状態の人格化である。もうひとつには、「翁おきな」(および「媪おうな」)としての意味を持つが、これは後で詳しく述べる。

ところで、物語は「昔、貧乏な夫婦がありました」で始まるが、夫婦が自分たちの貧しい生活を嘆いているとか、不運な生活と闘っているといった記述はどこにもない。ただ、そうである、ということだ。ただ、心の状況がそうなっていると言っているだけなのだ。感情や価値観といった主観をできるだけ排除した記述が、じつは昔話やおとぎ話に共通の特徴である。善悪の価値観や好き嫌いといった感情を排除して淡々と展開する物語に、その時代や社会の価値観や倫理観を投影するのは後の作業なのである。心のエネルギーが枯渇して行き詰った個人は、それまでに育まれた個人の価値基準や倫理観に照らして、主観として苦痛や悲嘆の感情を体験するのである。

分析心理学では、無意識の領域を含めた心を、それ自体が目的と方向性をもった自律的な存在であると考えられる。昔話の主人公が特別な意図を表明することなく、ただ前に進み、出会い、あるようにあるのは、心の自律性の写しに他ならないからである。

## 2. 糸へそ

夫婦は、年越しの仕度ができない事態である。婆さまは、「かねがね丹精して貯め」ていた糸臍いとぢを売って金に換えることを提案する。臍とは「綜麻」のことで、紡いだ麻糸を環状にして巻きつけたもの<sup>(11)</sup>をいう。麻は、古代から布の原料として一般的である。産地としては東北地方が主であったようだが、苧麻とちまを水にさらして細かく裂き、繊維をとり、それを撚って糸にしてかせ棒かせぼうに巻いたものが苧枷とちま(おかせ)である。『笠地蔵』では、「糸臍」のほかに「苧麻」、「へそこ」と表現する場合がある。東北地方の貧しい農村地域において、かつては夜なべ仕事として行われていたようである。ヘソクリは、夜なべをして少しずつため込んだ麻の糸を巻いた臍が語源である。婆さまが糸臍を夫に与える行為は、ギリシャ神話における、愛する男を助けて迷路からの脱出をもたらしたアリアドネ<sup>(12)</sup>のもつ糸を連想する。導き手としての女性像である。ユングは、男性の夢の中に、しばしばその男性の心の変容にとって重要な役割を担う女性像が登場することから、魂 Seele を意味する「アニマ anima」と名付けた。人間は心理的に両性具有である。つまり本来、人間の心は男女のペアで成り立っている。男性の場合、現実社会に適応するためにその時代や文化が要請する“男性”としての構え(ジェンダーと言ひ換えることもできよう)を意識の態度として創りあげてゆく。後述する「ペルソナ」である。その過程で生きられない心の一方、すなわち女性的心性は無意識に追いやられることになる。内的人格である。女性の場合は、逆に“女性”としての構えを求められるので、男性的心性(アニマに対してアニムス animus と名付けられる)は、より無意識

下に置かれることになる。この物語では、主人公の爺さまが全編にわたって一貫した姿で表現されていることから、男性の意識であり、意識の中心すなわち自我ととらえることもできる。婆さまは、自己実現の道筋を指し示す重要な役割を担うアニメの人格化と解釈することができよう。アニメーション animation からイメージされるよう、to animate は、～に生命を吹き込む、活気づけるの意をもつ。魂アニメの声は、男性の精神生活にとって重要である。この関係はしばしば現実の夫婦にも投影される。20世紀シュールレアリズム絵画の代表にあげられるルネ・マルグリットの作品には、しばしば幼馴染でもあった妻が描かれているように、妻となる女性が男性の心に生命力を吹き込む inspiring, すなわち創造的活動におけるインスピレーションの源となる。グリム童話など西洋の昔話では、しばしば若い男性と若い女性との幸福な結婚で物語の幕が閉じられる。日本の場合、老いたカップルが物語の初めに登場して、老婆が若い女性に変身することや老人が若い女性と結ばれることは少ない。あとで検討することになるが、老夫婦は日本文化において重要な役割をもつ「翁と媪」として、より神格化された存在であり、すなわち無意識に近いことから、西洋に比べ比較的曖昧な自我のありようが示唆されているかもしれない。

婆さまは、“貧乏な家”から爺さまを外に出す。心のエネルギーが枯渇して動きのとれない状態から、男性の意識が魂アニメの声を聴いたのである。婆さまは、手ぶらで家に帰った爺さまに対してその行為をむしろ賞賛している。現実の世界であれば役に立たない夫を非難するところであろうが、そうしない。この物語に繰り広げられる世界は、個人の心の全体を写している。心の回復にとって正しい道筋をたどったことに対して、アニメが評価しているのである。

### 3. 「翁」としての爺

爺さまは、町で笠売りに出会う。老人は、「翁」として日本文化において神の人格化と考えられている<sup>(13)</sup>。田の神は稲穂の束を抱えた老人の姿で描かれるが、先祖神が農業神と習合したものであろう。能では、「白楽天」における住吉明神としての老魚人、「志賀」における志賀明神の老樵、その他「高砂」、「絵馬」など、しばしば神が老人として登場する。金春禅竹は能楽論『明宿集』の中で、「翁おきな」と呼ばれるこれらの人格を「天地開闢ノ初ヨリ出現シマシマシテ」<sup>(14)</sup>と述べる。すなわち「翁」は、万物の始まりであり宇宙の根源、あらゆる現象を支配するような存在と考えられている。

大晦日の夜、古い年が去り新しい年が入り替わるその瞬間がこの物語の舞台となっている。新旧の年が入り替

わる瞬間は、8月の盆とともに祖先が我々のもとを訪れる聖なる時間として特別視されてきた。Eliade, M.<sup>(15)</sup>は、年の終わりに共同体に繰り広げられるどんちゃん騒ぎや対立する二つのグループ間に繰り広げられるセレモニーとしての戦い（そういえば、大晦日に人々の関心を集める、かの国民的番組も紅白に分かれての歌合戦ではないか！）などの祭りは、これらを繰り返すことで混沌カオスを経由して秩序コスモスの回復の集合的な体験と述べている。ローマ神話で一月の神とされるヤヌスは、彼自身が始まりと終わりであり、表と裏の二方向に顔を持っている。彼は、万物の始まりの神であり、始めと終わり、善と悪の対立する両面を同時に持っている。易学において一月は、陰と陽の合一、対立するものの統合、大地と空の統合を意味する。

網野<sup>(16)</sup>は、蓑笠が古代人にとって「一つの変相服装」であり、神、「まれびと」の衣裳であったと述べる。古来、笠は聖なるものの「よりしろ」としての機能を備えており、さらにその「よりしろ」を身に着けた本体の神格化を進める。すなわち笠売りから笠を受け取った爺は、まさに「翁」であり、田の神、年神となる。稲わらは、稲作の神の寄り付く座として、現代もなお正月の飾りに使用されている。中国地方では小正月の行事として、子どもたちが新藁で作った馬の人形をもって集落の家々を巡り、家人からお金や餅を受け取る風習があったようだが、神の「よりしろ」を携えた子どもは、来訪神としての性格を帯びており、餅や金で饗応されねばならないのである。

我々の物語では爺さまが糸へそを笠と交換する。交換の行為は、「わらしべ長者」を連想するまでもなく洋の東西を問わず昔話に多く語られる。「大歳オホトシの客」に類する昔話に語られる来訪神に対する饗応も、形態としては実は交換である。すなわち何かを差し出すことで超越的な存在からの恩恵を受けるのである。それは、餅やお金に象徴された新年の予祝であり、新たな心のエネルギーである。交換の場として“市”があるが、市川と石井は折口を引用しつつ次のように述べている。「そこ（サイの河原—筆者）は、山人と里人との交通の切れ目であり、両者の行き合うところでもあり、一種の市でもあった。市はたいてい山の端山はやまにあり、そのつぎに、山に近い河原にできたのである。市は物質を交換するだけでなく、男女が集まって歌をよみ、自由な夫婦のかたらいをする歌垣うたがきの場でもあった。」<sup>(17)</sup>『笠地蔵』には、新旧の歴の移行という時空の境界に物語が展開し、里の境界に発生する市において交換が行われる。

この物語には、幾重にも境界性が布置されている。

ところで、婆さまが夜なべ仕事に少しづつ貯めた糸へそが象徴するものは何であろうか。前述のようにこの場

合の糸は麻糸のことであり、麻布は古くから衣服に用いられてきた。衣服は、人間にとって環境の変化から身体を守る第二の皮膚である。うちと外との境界であり、制服のようにそれを着用することで個人の社会的属性が明確になることから、分析心理学ではペルソナの象徴である。「ペルソナ persona」は、仮面（per ~ を通って + sonare 音、響き）の意を持ち、ギリシャ語を語源としている。心理学用語で人格をあらわすパーソナリティ personality となっている。人格の成長は、服装やいでたちに代表される趣味嗜好が定まることでもあろうし、逆に服装は、その人らしさとなり人格全体を表現している側面もある。思春期の少女がお気に入りの男の子の制服のボタンを願うのも、相手そのものを手に入れたい代替として機能する。

ともあれペルソナは、外界と心の内面を区切り、かつ外界に向けてその個人の関係性や構えを表明する役割を担っている。周囲や社会といった集合的な期待あるいは要請と個としての要請との“折り合い”<sup>(18)</sup>である。人前にもかかわらず自分が裸にいることに気づき当惑したり、サイズが合わなかったり、似合う衣服が見つからず焦ったりする夢は、しばしば分析の場で報告される。個人の内的要請と外界への適応との関係に不都合が生じている—折り合いがつかぬ—ことを示唆している。ペルソナは、内的要請あるいは構えとされる魂 Seele と対をなす。このペルソナが集合的な要請に適応しようとするあまり堅固となったとき、魂とのつながりは失われてゆく。

うつ病者の病前性格としてしばしば、几帳面さや真面目さ忍耐強さが挙げられる。責任感の強さは、当人に決して手抜きを許さず、与えられた社会的役割に同一化して限界までエネルギーを使い果たしてしまうことがある。個人の内的な要請すなわち魂が無視されるのである。創造的エネルギーの源である魂の声を聴くことができなくなってゆくのである。抑うつ状態に陥るきっかけとして、社会的地位の変化である退職や昇進でさえ、あるいは転居や子どもの自立などの環境の変化などがあげられることがある。それまで関係性の中で築きあげられた社会的構えが、当の関係性そのものが無効になったために維持できなくなるからである。大学生活の中で深刻な抑うつ状態に陥った女性は、筆者との治療面接<sup>(19)</sup>の中で「良い子の仮面」をかぶったかつての自分について語った。真面目で努力家の彼女が精一杯果たしてきた“周囲に期待される良い子の役割”に対して、彼女の魂は症状として異議申し立てを行ったということであろう。

『笠地蔵』において婆さまが託した綜麻とは、一年の間に積み重ねられた古いペルソナ、取り換えられるべき外的な心の構えと解釈できよう。心の変容の始まりである。

#### 4. 地蔵

『笠地蔵』の物語が日本人にとってあまねく受け入れられている理由の一つは、私たちの「地蔵」に対する親和性によるものであろう。地蔵菩薩は、サンスクリット語で Kstigarbha, Ksti は大地であり Garbha は子宮あるいは包むもの、の意を持つ。すなわち生きとし生けるものすべてを包み込みはぐくむ母なる大地の恩寵の化身である。大地の力の人格化という考え方は、バラモン教における太古の大地神 Pritivi に由来する。インドにおいて発生した地蔵菩薩の信仰が、その後この地でどのような変遷をたどるのかについては不明であるという。しかしながら、地蔵菩薩信仰は中国を経て8世紀の奈良時代に日本にもたらされ、10世紀の平安時代、終末期思想の蔓延と呼応して民衆に広く受け入れられ、さらに土着の宗教や神道などと習合し現在のような形態になったようである。

地蔵菩薩は、釈迦が入滅してから56億7000万年後の弥勒の世となるまでの間、六道輪廻に苦しむ衆生の救済のために現世にとどまり続ける仏の一部である。日本では地蔵信仰はもっぱら現世利益の考え方が優位だが、地蔵は閻魔と同一視されることがある。『日本霊異記』には、死者の世界に連れて行かれた藤原朝臣広足が簾の向こうの人の名を尋ねたところ「我は閻羅王、汝が国に地蔵菩薩と称す、是なり」と答えた<sup>(20)</sup>ある。『今昔物語集』巻第一七は地蔵菩薩靈験譚が中心に語られているが、地蔵によって冥途の使者の手から救われて長生きする話<sup>(21)</sup>や、閻魔庁で地蔵に助けられる話<sup>(22)</sup>など、地蔵と冥界との関係は強い。好村<sup>(23)</sup>は、『今昔物語』に描かれた地蔵説話のうちの蘇生譚の構造について、他の説話集との比較検討を行っている。その中で、笠を脱いで地蔵の前を通り過ぎる、雨に濡れた地蔵に笠を被せる、などによって地蔵の慈悲を得る類型があると述べている。

現世と弥勒世、さらに地獄をも行き来する地蔵は、あの世とこの世を隔てる賽の河原思想や、集落の境界地点に石造物を置きそれを信仰の対象とするサエノカミ信仰<sup>(24)</sup>などの土着の宗教思想と結びついてゆく。我々の物語の地蔵が「野中」に立っているように、石造りの地蔵菩薩像は、村はずれや登山口など“あちらとこちら”を隔てる場所に今も見ることが出来る。現代でも例えば大きな事故などで死者がでるとその場所に石地蔵を立てて、花や食べ物を供えることがある。これらもまた、地蔵の二つの世界を結ぶ属性がひとびとに無意識的に共有されているということであろう。

二つの世界の境界として石を置くという考え方は、わが国最古の古典とされる『古事記』に見る<sup>(25)</sup>ことができる。イザナキは、火の神を産んだことで死んでしまったイザナミを探しに黄泉の国に向かうが、そこで変わり

果てた妻のおぞましい姿に恐れをなし、「見<sup>み</sup>畏<sup>かしこ</sup>みて逃げ還<sup>かえ</sup>る」。怒ったイザナミは、黄泉の国の醜女を遣わせて追いかせさせる。最後にイザナミが追いかけて来たので、黄泉比良坂<sup>ヨモツヒラサカ</sup>に大岩を立てて道を塞いでしまう。我が国の神話が語る死の起源<sup>(26)</sup>であり、この世とあの世の境界が創られたのである。死者の埋葬場所に石を置くことは日本だけではない。堅い石の持つ永遠性は、古代ゲルマン民族に死者の魂が墓石の中に生き続けるという考えをもたらした。『新約聖書』では、キリストが自らを石に喩えている<sup>(27)</sup>。貴石が本来、魔除けやお守りに用いられていることから、石は超越的な力の座であると信じられている。

ユングによれば、物質としての存在であり精神的存在でもある石は、物質的・生物学的存在と霊的・精神的存在の二重性をもつ人間を表象しており、自己<sup>セルフ</sup>の象徴である<sup>(28)</sup>。抽出し役立てる金属をそのうちに含む原材料であることは、錬金術で石を第一原料とみなすように個人の心のあらゆる可能性を示唆する。

キリスト十二使徒のひとりである聖ペテロの名前は“石”に由来する。彼は天国の扉を開ける鍵を与えられており、人々を天国に導く役目を担っている。グリム童話『Bruder Lustig (邦題：のんきぼうず)』<sup>(29)</sup>は、貧しい物乞いの姿で現れた聖ペテロが主人公を助ける物語である。von Franzは、次のように述べている。「ペテロは、一月 January の語源ともなる古代ローマの神ヤヌスの性質を多く受け継いでいる。キリスト教以前、ヤヌスは世界創造の最初の神、始めと終わりが対局物でありながら、彼において完全に一緒になる神・鍵を持つ神であり、聖ペテロはこの古い元型的な姿のある種の性質を受けている。(中略)…両面を見ることができたし鍵も持っている、古い異教の神の姿である。」<sup>(30)</sup>

地蔵菩薩像は、仏の声を聴く意をもつ声聞形といわれる若い僧形であることが多い。上述のように通常は石を刻んで作られ、巡礼者のしるしである錫杖を携えている。杖の先には鈴が付けられており、悪者を追い払う。

仏の慈悲の体現として、子どもの守護神としての地蔵という考え方は、8月の地蔵盆の主役が子どもたちであることから現代のひとびとにも広く受け入れられている。早逝の子どもたちが賽の河原で獄卒に苦しめられていると、地蔵がやって来てその錫杖で鬼どもを追い払うという信仰もまた、残っている。日本三大霊場のひとつ青森県下北半島にある恐山の本尊は、伽羅陀山地蔵大菩薩である。もともと、時代が下がるほどに救済思想は現世利益と結びつき、地蔵信仰は、とげぬき地蔵や子受け地蔵、厄除地蔵、身代り地蔵などが主流となってゆくのではあるが…。

杖は、聖なる力の「よりしろ」であり権威を表す。ギ

リシャ神話のヘルメス神は、神々の伝令であり、旅行の神である。数々の泥棒とうそつきのエピソードは、ヘルメスにたぐいまれな知恵者であり、発明の神という地位を与えている。三叉路に積まれた石 herm/hermaion は、のちに街道の交差点、広場、村はずれに見られるようになり、二つの世界の境界を守っている<sup>(31)</sup>。二匹の蛇が巻き付く caduceus と呼ばれる杖を持ち、死者を冥界に送り、死者の魂を呼び戻す。地蔵の錫杖も旅の杖であり衆生救済のためにあの世とこの世を往来する。両義性を帯びて、ヘルメスと地蔵の両者は、冥界との関係性、二つの世界をつなぐ役割において「psychopompos サイコポンプ」である。日本人の夢分析において、治療者が地蔵の姿で登場することがある。地蔵の姿を借りた治療者像であり、“心のあの世(意識を離れた世界)”に迷い込んだ魂の道案内者 pompos として救済にあたる。

## 5. 魂の救済と更新の物語として

爺さまと婆さまは、早く寝てしまうことにする。外は雪である。雪はその白い色から清浄さの象徴<sup>(32)</sup>である。あらゆる地上の穢れを覆い隠し浄化する。完全性と絶対性を象徴し、始まりの色であると同時に終わりの色である。多くの文化において、イニシエーションや結婚、そして葬礼の儀式に共通して用いられる。

冬至は太陽の力が最も弱くなることから、生命力の枯渇を意味している。「気<sup>ケ</sup>枯<sup>カレ</sup>れ」すなわち「穢れ」の状態である。ヨーロッパのクリスマスの起源は、常緑樹に蝋燭を灯して太陽の復活をねがうという原始宗教である。日本における正月の松飾や小正月の<sup>とんど</sup>なども、生命力の回復を願う古代の思想を背景にしている。『笠地蔵』では婆さまが糸へそを爺さまに託すことで状況が動き始める。糸へそは、パルソナであり「穢れ」である。イザナキは黄泉の国から逃げ帰ると、身を清める“禊ぎ祓え”を行う。冥界降りのテーマは、死者の世界に入ることであり、自らも死者になることである。すなわち、生者の世界に戻るには、死者の“気枯れ”を浄化して初めて命の復活がもたらされるのである。『古事記』では、続けて、禊の際に太陽神アマテラスが誕生するエピソードが語られる。生命の根源である太陽神アマテラスを巡っては、天の岩屋戸のエピソードにその重要性が明かされている。

一面の銀世界の静謐さは神秘的であり、超越的な存在との邂逅を約束する。昔話の『雪女』では、吹雪の晩に男のもとを見知らぬ女が訪ねてくるが、この美しい女は雪の精であり人間の支配の及ばぬ自然の力の人格化、超越的な存在の具現化である。

雪は地上に落ちる氷の結晶であり、ギリシャ神話では天上の神ゼウスと大地の女神ヘラの聖なる結婚といわれ

る。Jung は、心の変容過程を錬金術における作業になぞらえているが、雪を錬金術の最終目標である精神性の段階 albedo にあるメルクリウスを表象すると述べている<sup>(33)</sup>。すなわちここに、古い年と新しい年の時間の移行、物語中における登場人物の移動の水平軸に、天上世界と地上とを結ぶ雪の垂直軸が描き加えられることで神話的宇宙が出現する。これらの舞台装置を得て、物語の主人公に同一化した読み手の自我は、地蔵に象徴される媒介者によって超越的存在との邂逅を果たすのである。心の深層に広がる領域との接触であり、魂の更新の過程を追体験しているのであろう。

静かで深い共鳴を人々の心に呼び起こすこの小さな物語は、語られてきたように、この先も語られ続けることだろう。しかしながら、物語に選び取られたモチーフをひとつひとつ読み解くことで、我々は、読み手の心が神話的世界へと誘われ、それと知らず超越的存在との邂逅の壮大なドラマを追体験していることを知るのである。

#### IV おわりに

スタジオ・ジブリが創り出すアニメには、どの作品にも“風”が描かれている。草のそよぎや木々のざわめき、青い海に出現する白い波頭などが丹念に描きこまれ、我々はそこに風を体験する。目に見えない空気の流れは、具象物の動きや形の変化によって初めてそれと知られるのである。見えるものの背後に、見えないものがいつも存在していて、我々は目に見える現象から背後にあるものを想像するしかないということである。スタジオ・ジブリの公式サイトを開くと、最近、発表された『風立ちぬ』のプロダクション・ノートに興味深い記述を見つけた。劇中に登場する「天上大風」という言葉についてである。良寛のこの言葉を、「地上には風が吹いていないように思っても、天の上には大きな風（御仏の慈悲）が吹き、見守ってくれている<sup>(34)</sup>」と解釈しているのである。我々は、もはや風の起源を太陽の筒と結び付けることはない。しかしながら、例えばナナカマドの梢が前触れなく揺れたときに、超越的なものが一瞬、そこに立ち、そして去って行ったと感じることはないだろうか。モノヤコトの世界に繰り返される平凡な日常に生じた裂け目であり、神話的宇宙の開けである。

近代科学は自然を征服する道具として発展した。しかし、Jung は、我々が「自分自身の性質 (nature) を制御することを学んでさえいない<sup>(35)</sup>」と述べる。神話的思考が息づいていた社会では、人びとは自然界と人間界を自由に行き来していた。動物が言葉を話し、中沢によれば生と死の間にさえ同質性と対称性を見出そうとした<sup>(36)</sup>。やがて意識の発達は神話的思考を抑圧し、意識の光の届

かない無意識の領域が成立するわけであるが、中沢はさらに、対称性の論理に基づく神話的思考と、非対称性の論理に基づく科学的思考とが対立するものではなく、親密な関係にある<sup>(37)</sup>と述べる。先に述べたナナカマドの枝は、科学的思考の論理の意識に生じた太古の記憶の侵入を導いたのかもれない。昔話は、語り語られることで我々に神話的思考の記憶を呼び覚ます。昔話を通して、我々の意識は無意識との関係を回復し魂の更新の体験を先取りし、やがては個人神話の創造に向かうのである。

#### 【注】

- (1) 『笠地蔵』の英訳については、Ralph F. McCarthy 講談社 (1985) によるものでは標題を“Bamboo Hats for Jizo”としている。
- (2) Jung, C.G. (1964) MAN AND HIS SYMBOLS Aldus Books Limited, London 人間と象徴—無意識の世界・上巻 河合隼雄訳 (1975) 河出書房 p.38
- (3) Jung, C.G. Collected Work (以降 C.W. と表記する) 8 paras. 317-321 エッセンシャル・ユング 山中康宏監修 菅野信夫・他訳 (1997) 創元社 pp.78-79 「ある日私はそこで、彼が眩しそうにしながら窓から太陽を眺め、奇妙な方法で頭を左右に振っているのに出会った。彼は私の腕を取り、私にあるものを見せたいのだと言った。そして、半ば目を閉じて太陽を見れば、太陽のペニスが見える、さらに頭を左右に動かせば太陽のペニスも動くであろう、そしてそれこそが風の起源である、と彼は述べたのである。」
- (4) 車田正美作 1985年にコミック雑誌の連載として発表された漫画のタイトル
- (5) 山本将士 (2008) 笠地蔵の教材価値に関する比較研究—原話と再話に関する比較研究試論— 人間文化研究第10号 名古屋市立大学大学院人間文化研究科
- (6) 例えば、光村図書出版から発行されている道徳の副読本
- (7) 関敬吾 (1978) 日本昔話大成 第5巻 本格昔話四 pp.58-59 角川書店
- (8) 日本昔話辞典 (1977) 稲田浩二編 弘文堂 pp.145-146
- (9) 野村純一編 (1991) 昔話・伝説必携 別冊国文学 No.41 學燈社
- (10) 同上
- (11) 広辞苑 岩波書店
- (12) The Chiron Dictionary of Greek & Roman Mythology 1990 Chiron Publication Wilmette, Illinois
- (13) 柳田國男 (1946) 先祖の話 筑摩書房
- (14) 金春禪竹 明宿集 日本思想体系 24 (1974) 世阿弥・禪竹 表章・加藤周一 岩波書店 p.401
- (15) Eliade, M. (1954) The Myth of The Eternal Return, Bollingen Foundation, N.Y.
- (16) 網野善彦 (1993) 異形の王権 平凡社ライブラリー
- (17) 市川健夫・石井進 (1984) 峠の歴史と民俗 日本民俗文化体系第6巻 漂白と定住=定住社会への道= 第2章 pp.124-125
- (18) 大場登 (2000) ユングの「ペルソナ」再考—心理療法的接近 日本心理臨床学会・心理臨床学モノグラフ第

## 1 卷 創元社

- (19) 宮野素子 (1993) 自己同一性危機の時間制限心理療法—「仮面」を脱いだ女子学生の症例— 生徒指導研究 第4号兵庫教育大学 pp.83-92
- (20) 日本霊異記 景戒編 新編日本古典文学全集 10 (1995) 中田祝夫校注・訳 小学館 p.269
- (21) 今昔物語集 新編日本古典文学全集 36 (2000) 校注・訳 馬淵和夫・国東 文磨・稲垣泰一 pp.329-332 (「東大寺藏満依地藏助得活語第十七」)
- (22) 同上 pp.338-340 (「播磨国公真依地藏助得活語第二十」)
- (23) 好村友江 (1995) 地藏説話の〈蘇生譚〉が意図するもの—『今昔物語集』巻十七を中心として— 日本文学研究 30 pp.89-100
- (24) 市川健夫・石井進 (1984) 前掲書 pp.122-123
- (25) 古事記 (1993) 古事記 (上) 全訳注 第23版 次田真幸 講談社
- (26) 吉田敦彦 (1989) 日本神話の特色 p.204 青土社
- (27) 新約聖書 ルカによる福音書 第20章「家を建てる者の捨てた石, これが隅の親石となった。」聖書 新共同訳
- (28) Jung, C.G. Collected Work VIII par.387
- (29) グリム童話 KHM81 『Bruder Lustig』
- (30) von Franz, M-L (1974) Shadow and Evil in Fairy Tales, Spring おとぎ話における影 (1981) 氏原寛訳 人文書院 p.96
- (31) Kerényi, K. (1976) Hermes Guide of Souls, Spring Publications, Zürich
- (32) THE HERDER SYMBOL DICTIONARY 5th edition (1990) Chiron Publications Whilmette, Illinois
- (33) Jung, C.G. C.W.8 par.263
- (34) スタジオ・ジブリ公式サイト「風立ちぬ」プロダクション・ノート [www.ghibli.jp](http://www.ghibli.jp)
- (35) Jung, C.G. (1964) 前掲書 p.153
- (36) 中沢新一 (2004) 対称性人類学 カイエ・ソバージュ V 講談社 p.31
- (37) 同上 p.37-38